



ビーバー族のしるし

スパア作 こだまともこ訳 あすなろ書房

一七六八年、アメリカ。十二歳のマットは父さんと二人で未知の土地にやってきた。土地を切り開き、家を建てる。父さんは残りの家族を迎えに旅立つ。マットは大自然の中たったひとりで暮らすことになったが、クマに食料を奪われ、ハチに襲われて倒れてしまう。そんな彼を助けたのは、インディアンの老人だった。

その老人は、食べ物をお届けるかわりに、孫に「白い人のしるし」(白人の文字)を教えてほしいという。

こうしてマットとインディアン少年との不思議な交流が始まった。

